

そうでなくても、私どもはあなたのおうちの戸棚へなど参ったこともございませんし、ましてこれほどお世話になりながら、どうしてそれをいただくなんてできましよう。」と言いました「いや、そのことではないんだただ食べるのかと聞いたんだ。では食べるんだな。ちょっと待てよ。その腹の悪い子供へやるからな。」ゴーシュはセロを床へ置いて、戸棚からパンを一つまみ、むしって野ねずみの前へ置きました。野ねずみはもうまるでばかのようになって、泣い

たり、笑ったり、おじぎをしたりしてから、大事そうにそれをくわえて、子供を先に立てて外へ出て行きました。「あー。ねずみと話すのもなかなか疲れるもんだ。」ゴーシュは寢床へどっかり倒れて、すぐグーグー眠ってしまいました。それから六日目の晩でした。金星音楽団の人たちは、町の公会堂のホールの裏にある控室へみんなぱっと頭をほてらして、めいめい楽器を持って、ぞろぞろホールの舞台から引きあげて来ました。首尾よく第六交響曲を仕上げたの

です。ホールでは拍手の音がまだ嵐のように鳴っています。楽長はポケットへ手をつっ込んで拍手なんかどうでもいいというように、ノソノソとみんなの間を落ち着きなく歩きまわっていましたが、実は嬉しさでいっぱいだったのです。まだ、拍手は